

平成一九年九月・自由民主党総裁選挙における

麻生太郎全演説

まえがき

先の自由民主党総裁選挙では、敗れたりとはいえ、お蔭をもちまして予想を上回る支持票をいただくことができました。

ここに示された期待や意思を重く、かつ深く受け止め、日本国と日本国民の平和と幸せを伸ばしてゆくため、今後とも政治家として弛まず精進を重ねて参る所存です。

「数」における劣勢をいくらでも挽回するべく、わたくしは演説を練ることにしました。言葉に力と命を込め、思いの丈を託すことにしました。

幸い、本選挙では何度か、党員・党友を前にして、あるいはメディアに身をさらし、まとまった所見を述べる機会が用意されていました。短い持ち時間で、なおかつ豊かな内容を鋭角的に語るには、自分の経験から、周到な準備の必要なのが分かっていました。そこで陣営同志諸君の助けを借りつつ、事前に練り上げて臨んだのがここにまとめた草稿です。

改めて、諸賢の参照に供すものです。自分では歴史観から思想・信条に至るまで、強い言葉にして述べたつもりです。「半導体の新しい作り方」とか、「紙芝居こそは偉大な失対事業だった」というような点まで、エピソードもなるべく盛り込もうと努めているところ、どうぞご覧下さい。

そのあたり、報道では十分伝わらなかったところを含めまして、再度ご高覧に賜れますと幸いこれに勝るものはありません。諸賢のご批評をお待ちしております。

平成 一九年十月

麻生太郎

目次

まえがき	2
自由民主党主催・総裁選挙・所見発表演説会	4
<i>Taro Aso & Yasuo Fukuda, LDP Presidential Candidates</i>	
日本外国特派員協会における所見発表・和文	12
同右(英文)	18
自民党青年局主催・公開討論会	23
日本記者クラブ主催・公開討論会	29

総裁選挙・所見発表演説会

平成一九年九月二六日(日)午後二時〇〇分

自由民主党本部八階ホール

麻生太郎所見発表演説

衆議院議員 麻生太郎

麻生太郎でございます。

親愛なる同僚議員の皆さん、自由民主党党员、党友の皆さん。皆さんを通じ、わたくしは敬愛する、日本国民の皆さんに申し上げます。

そして世界の皆様に、わたくしはおのれの信ずるところを訴えます。

わたしが愛する日本は、いま、この瞬間、立ちすくんでおりません。本来歩みを止めるべきでないときに、急停止を余儀なくされております。

このことを思うにつけ、わたくしは断腸の思いに駆られます。

責任を果たさそうとして、果たせずにありますこの一週間、またこの先の、一週間。政治の空白に、痛切な責任を感じます。国民の皆様に、心からお詫びを申し上げる次第です。

だからこそ、この総裁選挙に課された期待と、責任は、このほか大きい、そう思わないではられません。

●本総裁選の意義とは

自由民主党が本当に変わったのか。国民は見ております。

開かれた国民政党として、その名に恥じない政党になったのか。

国民は、瞳を凝らしております。

本総裁選挙の意義は、まずもって、その点にこそあろうと存じます。

後世、歴史家がふりかえるとき、古い自民党と、小泉改革以来の、新しい自民党との再試合だったと、そう記述するでありましょう。

どんな結末をもたらすのか。われわれに課せられた責務は重大であろうと存じます。

わたしどもすべて、国民の目を強く意識し、政策をもって白黒をつける戦いを、堂々と戦わねばならぬと存じます。

わたくしは、皆様の前に、政策の選択肢をお見せします。

わたくしが信じる、日本人の能力を語ろうと思います。

指導者に求められる、資質を申し上げます。

そのうえで、何を選ぶのか。

公平無私の見方、国益を忘れぬ目をもって、選んでいただきたい、このように思います。

●「強い」指導者として「希望」を語る

急ごしらえでつくった合意は、簡単に崩れます。

あわててまとめた多数派は、成立のその瞬間、瓦解へ向けて動き出します。

我が自由民主党は、既にそのことを、過去の歴史から学んではずでありました。

我が党は長い歴史において、ある結論に達しておりました。

それは、指導者を選ぶとき、国民に広く、候補者と政策の選択

肢をお見せし、国民の声を聞きながら選ぶのでなければならぬという、そのことでもあります。

皆さん、

いまほど日本が、危機に臨んで動じない、「強い」指導者を必要としているときは、ありません。

「安定した」指導者では、ありません。「強くて、頼りになる」指導者をこそ、必要としております。

また、いまほど日本の農山村、漁村、地域の経済が、たった二文字を求め、渴望しているときは、ありません。

その二文字とは、「希望」であります。

●「朝に希望をもって目覚め、昼は懸命に働き…」

皆さん、

朝(あした)に希望をもって目覚め、昼は懸命に働き、夜は、感謝とともに床につく。

人間の営みとは、もしこの三つが十分にできるなら、幸せなのだと思えます。

わたくしは、日本の若者に希望を与えたい。

農山村、漁村のおじいちゃん、おばあちゃんに、この先、そんなに悪くはなりませんよ、きっといいことがありますよという、希望を感じてもらいたい。

わたくしは、毎晩、感謝の思いとともに眠りに就けるよう、粉骨碎身、この身を捧げて参る所存です。

またいまくらい、日本の発する言葉が重みを増しているときも、ないのであります。

日本の発する言葉とは、煎じ詰めたところ、総理の発する言葉であります。

世界がそれに、耳を傾けます。

日本の環境を守り、治山治水に精を出しておられるお父さん、お弁当をつくって子供を送り出し、それから自分も働きに出るお母さん、あるいはまた、ネットカフェ難民と呼ばれ、あしたの暮らしを心配する若者にも、総理は呼びかけなくてはならぬのだと存じます。

わたくしは、「強い」言葉を発する総理になりたいと存じます。我が国の進むべき道はこうだと、明確な言葉を語れる総理になりたいと存じます。

日本というのは素晴らしい国だ、頼りになる仲間だ、そして、尊敬すべき国だと、諸外国の指導者に、また国民に思ってもらえることができる、そういう言葉を発することできる、総理大臣になりたいと、考えております。

● 実力解放、自力成長

総理に選ばれましたあかつきには、日本をどんなふうに変えたのか。

申し上げます。

日本と日本人の底力に、わたしは揺るぎない信頼を置いております。

その底力を、存分に解放すること。

それによつて、力強い成長の軌道に、いまいちど我が国を乗せることでもあります。

地方経済に、息を吹き返させることでもあります。

実力解放、自力成長、であります。

これから具体的な例を、内政について三つ、それから外交について三つ、申しあげます。

● 年金、格差、そして経営者の眼による成長戦略

始めは内政についてであります。

第一は、将来不安の払拭。これは目下の状況で、まずは年金の話だと存じます。

第二に、徹底的な機会の平等。不当な格差は、断固つぶすということです。

第三に、経営者の目をもつて、新たな成長戦略を力強く押し進める、ということでもあります。

順に、ご説明いたします。

まずは年金であります。

支払い漏れが一人もないよう、徹底を期します。

そのため、すべての国民の皆様は、年金が確認できる葉書をお送りします。

●信頼に足る年金制度へ政権の命賭ける

社会保険庁、自治体窓口で保険料を横領した不逞の輩の行いは、金額の多寡を問わず、言語道断の所業であります。

なぜなら、これは制度に寄せる国民の信頼を根底から掘り崩し、ひいては政治それ自体に対する不信を助長するからに、ほかなりません。

わたくしは、年金が国民の未来を託すにたる、信頼の置ける制度に生まれ変わるよう、政権の命を賭けて取り組んで参ります。

加えて、年金問題の本当の核心は、今日ただいま三五歳の青年が、六五歳になったとき、安心して暮らせるか。

そこに、見通しをつけさせてやることにあるかと存じます。

まずは現行制度に不公平をなくし、次に年金制度の将来設計を考え直す。

このことに、総力をつぎ込む所存です。

第二は、機会の平等です。

●人間とは選択する動物であるからこそ…

四〇歳とか、五〇歳になれば、人間、自分の顔に責任を持って、といえます。

危機に及んでどつしり落ち着き、ほほえみを絶やさぬ顔。

わたくしは、こういう顔を国民の皆様にお見せすることも指導者の使命であろうと信じます。

人間とは、目の前の選択肢の中から、ひとつひとつ選んでいき、ついに顔をも自分でつくるわけであります。

ところが、おぎやあと生まれたその場所が、日本のどこであるか。

生んでくれた両親が、どんな両親であるか。

自分で選ぶことはできません。

したがって、政府が心がけるべき最も大事なことは、機会の平等を徹底して図ることにあります。

そこから、格差の是正という、緊急の政策課題が出て参ります。

す。

中でも、農山村、漁村といった、地方。

企業でいえば、中小零細企業。

ここに、いまの日本では、強い影が落ちております。

農山村、漁村に生まれつき、中小零細企業に働く両親のもとに生を受けた子供が、ただそのことだけで将来に豊かな展望をもてない……

そんなことになれば、日本は日本でなくなりませう。

●地方交付税と補助金の改革を

方法はあります。

例えば、地方交付税のあり方を大幅に変えることが、その一つと存じます。

補助金にしても、地方が自分の工夫を活かして使えるようにしてやることです。

総務大臣として、わたくしは、国から地方へ三兆円の税源移譲という大改革を手がけました。全庁が反対でした。

地方にできることは地方にという、構造改革をさらに進めませう。

危機に追い込まれたとき、人間は二つの反応をとるであろうと思えます。

助けてくれーと言って、人を当てにする。

なにくそと言って、自分で活路を開く。

中央と地方の関係が今のままですと、地方に「なにくそ」という気持ちがあるか起きませう。

●加賀屋と旭山動物園にできたこと

例を挙げませう。

能登半島の加賀屋。老舗の旅館です。

交通の便が悪く、だんだんと客足が遠のいておりました。

しかし、仲居さんに英語や中国語を勉強させ、台北や香港からのお客さんを増やして伸びました。

このあいだ、地震の被害に遭われましたが、評判はいささかも衰えておりませう。

それから北海道の、旭川にある、旭山動物園。わたしも行きませう。今では日本一有名な動物園です。

あれも、なにくそと言って、活路を開いた一例です。

企業や、団体には、こういうことがいくらでもできる。自治体にも、これはできるといふふうにせねばならんでありませう。

別の例を挙げませう。

半導体は、シリコンの板に、回路を書きませう。

普通、回路は平面に並べます。

しかし一定面積の板に、回路を平面に並べる微細な技術は、もう限界に来ております。

それなら回路を、垂直に重ねて書いていけば、限界を突破できるじゃないか。

実はこれ、世界最先端の技術ですが、日本人の科学者が思いついた独創です。

●「とてつもない日本」の底力を、地方へ

圧倒的競争力をもつこんな技術で、我が国がいまいちど、半導体産業の先頭に立つ。

そんなことも、不可能ではありません。

申し上げます。日本の底力には、「とてつもない」ものがあるのだと、そう存じます。

そしてそういう技術をもった工場を、地方が誘致してはどうでしょうか。

観光産業なら、お客さんを広くアジアに求めるとか、エコツーリズムの客を、思いきってオーストラリアやニュージーランドに求めるとか、自治体には頭さえ絞れば、そして、それを許す財政的裏付けと人材さえあれば、できることがいろいろとある。

わたくしの都市・地方間格差是正政策の根本には、市町村長が、地域経営者としての発想をもって、動きやすくする、そういう

背骨が通っております。

●霞が関と地方に、経営者の発想を

申し上げますが、こういう話は霞が関からは、出てきません。

総理総裁に求められる力とは、霞が関に信頼されつつ、違うアイデア、違う発想を、彼らには到底思いつけない突破口を、示してやることです。

それに必要な総裁の能力とは、あらゆる人に、この人と話したい、聞いてもらいたい、アイデアを教えたい、そう思ってもらえることです。

そして第三は、経営者の目をもって、新たな成長戦略を力強く推し進めるといふことであります。

成長促進、といいますと、予算をくれ、という。

これが、お役人の発想。

何か新しい商売を探したり、仕入れの仕方を変えて原価をぐっと下げたり、これが経営者の発想です。

我が党の、政調会長をさせていただいたときでありました。

港の通関やら、建築申請やら、そのたびに役所に紙を提出しろという法律が、数えてみたら五万二一〇〇本もありました。

それを、たった一本新しい法律を作り、一回で、それもオンラインで、手続きが済むようにしました。
すさまじい抵抗はありましたが、構造改革とは、こういうことをやるのであります。

日本経済のコストを、思い切つて下げてやる。

それで、利幅が増えれば、株の配当も、働く人の給料も、ともに上がる。

こういうやり方は、いくらでもあります。

ただし、役所の縦割りを残しては、何もできません。

強い政治指導者がいて、初めて可能なのであろうと存じます。

●インド洋の給油活動は国益そのもの

外交に、話を移します。

三つ申し上げたいのは、第一に、インド洋の給油活動。

第二に、いま日本の外交が歴史的転機にあるということ。

第三が、拉致問題の解決です。

インド洋の活動は、日本が国益をかけ、自分のためにやっていることです。

六年前の九月一日、日本人も二四人犠牲になったことをわれわれは忘れてはなりません。

インド洋は、日本に油を送る、シーレーンの出発点でもありま

す。

ここをテロリストの勝手気ままにさせてはならぬ。

日本の国益とは、その一点に集中します。

これを、アメリカのためなどと言うのは、事実誤認も甚だしい。

●広がる日本外交の地平

ヨーロッパの国々が、日本を見直したのは、この給油活動です。

それからイラクに行つて、盗みの一つも犯さず、見事な規律を示したわが自衛隊の諸君を見て、イギリスやオランダは驚きました。

皆さん、

我が国のGDPは世界の10%を占めます。中国、韓国、ロシアを足したより、まだでかいですから。

それにふさわしい貢献を、日本は立派にやっている。

こう、彼らが心の底から得心した。

それでいま、我が国の外交は、大きく地平を広げました。これが、第二の点です。

欧州諸国と一緒になり、東欧諸国、バルカン諸国で、自由と、繁栄を伸ばしていく。

こういう政策ができるようになった。

安倍総理は、インドの国会でこれを「自由と繁栄の弧」をつくる政策だと紹介されました。

アメリカと、オーストラリアと、一緒になって、アジアや太平洋の安全にもっと責任をもつていこう、という政策につながった。

それらの根も、元をただとすと、インド洋の活動にあつたのであります。

これだけのスケールをもつ活動なのだとということをも、誰かが国民に語り続けていかねばなりません。わたくしは、やってまいる所存です。

日米同盟の強化は、こういういろんなルートから、もつとできるよようになります。

●にぶく曇った新潟の海——拉致問題断固解決へ

第三は、拉致問題の解決であります。

わたしは、新潟の海岸に足を運びました。

横田めぐみさんが連れ去られた、その場所に行きました。

にぶく曇る、日本海を見ました。涙がにじみました。

断固、あきらめません。わたくしは日本国の主権をかけ、国民の生命を守るといふ、国家にとつて最も重要な任務の遂行のため、北朝鮮に解決を迫ります。

最後に申し上げます。

●日本はわたしの誇り

わたくしは、パレスチナの若者が、日本を待っているのを知っております。

ホンジュラスの子供達が、青年海外協力隊がこしらえた教科書で、

算数を学び、学校が好きになったことを知っております。

カンボジアの民法をつくっているのが、まだうら若い、日本の女性であることを知っています。

日本は、わたしたちが誇りとする国家です。まさに、「どてつもない日本」なのです。

わたくしの愛し、誇りとしてやまぬ日本を、日本人一人ひとりが誇りとし、未来に希望を、活力を求めることができる国になるよう、命を賭けて参ります。

全国の党員、党友、ならびに国会議員諸先生の深いご理解をお願い申し上げ、麻生太郎の所見の表明といたします。

(了)

Taro Aso & Yasuo Fukuda, LDP Presidential Candidates

本稿は英語演説の和訳として同時通訳者の底本となったもの。英語原文は後掲

平成一九年九月一九日(水)午後二時三〇分—二時

日本外国特派員協会(有楽町電気ビル)

麻生太郎所見発表演説

衆議院議員 麻生太郎

お招きいただき、感謝いたします。

時間を節約するため、冒頭発言を英語でいたします。

皆さんの質問には、日本語で答えることにいたします。

●もしわたしが立たなかったら…

経済政策と、外交政策についてお話をいたします。

但し初めに、ひとつ申し上げさせてください。

もしわたしが立候補する道を選んではいなければ、選挙は何もなかったところでした。

わたくしの相手は、政見をなにひとつ、語る必要すらなかったところでした。

このレースとは、皆さん、古い自民党
VS
新しい自民党でありま

す。

皆さんは、この古い自民党というのが、一夜にしてまとまるのをご覧になりました。

これはまったくのデジャブ。二〇年か、三〇年前に引き戻されるかの、感がございました。

何度も、わたくしは、自分の考えというものを世に知らしめて参りました。

みなさんがたこそ、ご存知でしょう。

最初にお知りになった方々と存じます。

日本が進むべき道とか、日本の取るべき政策について、わたくしが何を大事に考えているか、ということがあります。

わたくしの念ずるところとは、我が党党員の皆さんが、自らの信

ずるところに従って、指導者を選んでほしいという、そのことでもあります。

●求められるリーダーとは

そんなことを申しますのも、今こそ日本は、強い指導者を必要としているからであります。

頼りになるリーダーを必要としているからです。

霞が関マシンを率いることのできる、指導者であります。

まさにそのマシンに、つつい引きずられてしまふ、指導者ではありません。

大掛かりな、地方への権限移譲。

地方政府に、力を与えること。

年金制度の、完全な作り直し。

それから日本人にもう一度、事業家精神を与え、経済を動かすような一連の政策。

そういうことを、わたくしども、やらねばなりません。

いま、やらなくてはならぬのです。

そしてそれを進めるのに、リーダーがいるのであります。

ビジョンをもって、人々を励まし、また目を開かせるような。

そしてガッツをもって、人々を引つ張ることのできるような、リーダーであります。

●楽観的になれない理由が見当たらない

わたくしはいま、既に内政の課題に少々触れました。

内政の課題とは、日本の人たちがもっている、とてつもない潜在力というものを、解き放つてやることです。

なぜならわたくしは、日本人のポテンシャルに対する信頼を、一度として失ったことがないからです。

どんなふうにして国を再建させ、そして成長するか、というその潜在力に対して、であります。

申し上げますが、

日本というのは、そのサイズを見ると、中国、ロシア、インドと一緒にしたのより、まだ大きい。

日本が二・五%伸びますと、新しくシンガポール一国分ができません。

この点、楽観的になれない理由というものが、わたしには全く見当たらないのであります。

ではどうやって、これを実現しようとしているか。

三点、あります。

その一。都市と地方の、格差を埋めることです。

その二。成長を追い求め、国家を引つ張るに際し、企業の再生を図るようにして、これに当たる、ということでもあります。そしてその三。年金制度を立て直し、人々に、未来への希望を持たせることでもあります。

●「どこへも通じない道」を作るのではなく

では地域の経済を、再び成長させるにはどうすればいいでしょうか。

それには、どこへも通じない道路とか、なんにもつながない橋とか、は必要ありません。

やらねばならないのは、地方自治体に、もっと、さらに多くの自由を与えることです。

経済を、彼ら自身に育てさせるためであります。

そうできるよう、わたしは税制を変革します。

言葉を換えますと、大掛かりな地方分権を進めて参りたい。

これは、小泉純一郎さんが、やりたかったことでもありますし、わたし自身にしても、総務大臣として着手したことであります。

それでは成長の追求は、どうでしょうか。

どこに、ムダがあり、どのボタンを、最初に押すといろんな変革

が起きるのか。

それを見極める、ベテラン経営者の識見が必要です。

そのボタンというのを、小泉さんは郵貯に見つけました。

●規制も変え方次第で成長力に

わたくしは、規制の改革を続けて参ります。もつと効果の上がる、規制改革であります。

ひとつ、例をお示します。

五年前、わたくしが自民党政調会長として、やった仕事であります。

その当時、なにか、行政の手続きに絡むことをしようとすると、自治体などの政府に対し、ともかく書類を紙で提出しないといけませんでした。

その数を、数えてみました。

分かったことというのは、五万二一〇〇種類もの手続きにおいて、です。

政府に対して書類を送るか、手渡しに行くか、しないといけないことになっていました。

わたくしは、それを全部、変えました。
たつた一本の法律、二〇〇二年法律第一五一号という、一本の法律を作ることによつて、であります。

いまは、全部オンラインでできます。

地方自治体の役所に、出向いて行く必要は、ありません。
コンピュータで一回クリックすると、それで全部おしまい、です。

●構造改革の本質

構造改革というのは、こういうものです。

日本経済の、コストを下げてやることです。

それによつて利幅を大きくし、株主に多くを、従業員にも多くを、払えるようにすることです。

それから年金制度について。

だれもがみな、政府から、報せを確実に受け取るようにします。

自分の年金がどうなっているか、はっきりわかるようにするためです。

これは、人々を、安心させることです。

未来に、希望をもつてよいと、確かに言うことです。

皆さん、わたくしという人間は、日本人が何を成し遂げ得るかに関し、希望を失つたことなどありません。

●「日米」をあえて語らず

外交政策に関して、二、三申し上げることいたします。

とは申しませんが、日米の絆について、何事か語る必要は一切感じません。

その重要性たるや、自明であり、今後もまたそうであるからです。

それに、絆がこれほど強かったときは、今までなかったくらいであります。

もしご興味がおありになれば、「私とアメリカ」という題のエッセイを、二、三か月前出した本に載っています。

これを、ご覧ください。

わたしの米国観を、書いてございます。

アジアに話を移しますが、アジア諸国との関係を深くするため、わたしは一刻もムダにしません。

ソウルから北京、シンガポールからデリーまで、前途には多くの機会が待ち受けているからです。

●麻生 李 日中外相「会談」の場所とは

ご記憶を喚起させていただかねばなりません。

わたくしは、日本人として最初の、外務大臣でありました。

中国の台頭を「歓迎」すると、オープンな形で発言した最初の外務大臣、ということです。

新聞で、このごろ言っております。

中国の、前の外交部長官の、李肇星さん。

この人と、わたしは、よりにもよって、トイレで小話をした、という話です。

それがきっかけになって、日中は、関係を修復できた、と言っております。

打ち明けなくてはなりません。これは、実のところ、真実でありました。

ちよつとした、国家機密を漏らしてしまいました。

ともかく、李さんとわたくしは、うまい関係、実際、良好な関係を結びまして、そのことをわたしは誇りに思っております。

中国くらい、日本にとって重要な国というのは、ざらにありません。

良い関係は、絶対に大切なものです。

安倍総理の功績ですが、日中間の氷は、解けてなくなりました。

これに、わたしはとても喜んでおります。

●経済的繁栄と民主主義↓平和と幸福

それからわたくしが、中国の将来に関し、はなはだ強気である。このことも、思い出していただかなくてはなりません。

皆さん、

平和と、幸福というものは、いつも、経済の繁栄、それに民主主義というものと、車の両輪のようにして、進みます。

わたくしは、いまこの地域に起きていることというのは、まさしくこれである、と思います。

インドネシアで起きている、それから中国でも、であります。

それを申しますなら、ほとんど至るところで、と申してもいいでしょう。

カンボジアから、カザフスタン。グルジアから、ラトビア。

もしも、こういう国々に、日本のプレゼンスがあったら、ということとです。

何事か、役に立つであろう、と思います。

●「自由と繁栄の弧」をつくるとは

と、言いますのも、二年ちかく前ですか、わたくしは、この場所で、申し上げました。

日本という国は「*Been there done that*」の国だからです。

いい時と、悪い時と、ともに経験している。

成功があれば、失敗の経験もある、そういう国が日本だからです。

この、ひとつの確信があったので、わたしは外務省の連中と一緒にやりました。

そして、新機軸をひとつ、打ち出しました。

それが、「自由と繁栄の弧」をつくるというものです。

但しお忘れいただきたくは、ありません。

これは私の、私独自の政策だと、言われるかもしれませんが。

事実はどうに、誰しもの、政策でもあります。

要するに、日本自体の、政策だからです。

●時計の針を逆には回させない

最後になりました。

自衛隊の、男女の皆さんの、ご努力。

その献身ぶりと、規律。

イラクの地において、インド沖の大洋において、彼らがそれらを示されるということが、仮になかったとしたら、わたくしども、ここまで来ることが、できてはいないところでありました。

この人たちが、NATOや、それから米国の同僚たちから勝ち得た敬意というもの。

それは、わたくしにとつて、今日に至るまで、大いなる誇りの源泉たり続けております。

わたくしは、時計の針を逆には回させません。

外交分野において。

内政の側面において。

そして、わたくしが最も大切に思う、政党において、であります。

ご清聴ありがとうございました。

(了)

Taro Aso & Yasuo Fukuda, LDP Presidential Candidates

2007 Sep 19 12:30 - 14:00

The Foreign Correspondents' Club of Japan

Opening Statement

By Taro Aso

Thank you very much for inviting me. To save time, I will give you my opening statement in English. I will then answer your questions in Japanese.

I will talk about my economic policies, and foreign policies. But first, may I say this.

Had I not chosen to run, there was absolutely no election. People in Japan could not have heard any policy debate.

This race, ladies and gentlemen, is about an Old LDP versus a New LDP.

You saw an Old LDP gathered force overnight. It was

such a *deja-vu*, bringing me back to twenty, thirty years ago.

Many times, I have talked on my policies. You are the ones, among the first ones, who know what I stand for, on Japan's directions, and on Japan's policies.

My hope is, that my fellow members of the party would choose their leader based on what they believe in.

I say this, because now is the time for Japan to need a strong leader, a reliable leader that leads the machine in Kasumigaseki, not the one, who is tempted to be led by the very machine.

A massive devolution, that gives power to the local governments: A complete reconstruction of the pension scheme: And a set of policies that would give “entrepreneur spirit” once again to the Japanese to drive the economy...

We must do them and do them now.

And to do it you need a leader, a kind of leader, who can encourage and inspire the people with his vision, and lead them with his guts.

I have already spoken a bit on my domestic agenda.

It is to unleash the tremendous potential the people in Japan have, because I have never lost faith in how they can turn themselves around and to grow.

And by the way, given the size of Japanese economy that is bigger than China, Russia, and India put together, a 2.5% growth of Japan can create an entire Singapore. And I see no reason as to why you cannot be optimistic on

that.

How do I want to do this?

Three points, here.

Number one:
to fill the gap between the rural and city economies.

Number two:
to seek growth and lead the nation just like turning around a company.

And number three:
to fix the pension scheme and to provide people with hope for the future.

Now, to bring the local economies back into growth, what is to be done?

You need no roads that lead to nowhere, or bridges that connect nothing.

But you need to give more, much more freedom to local governments for them to build their economies by themselves.

I will change the tax system in order for it to happen.

In other words, I will push forward a massive devolution process that Prime Minister Koizumi wanted to do, and I for one started to do as Interior Minister.

How about seeking growth?

You need an eye of a seasoned manager to see where the fat is and to find the first string to be pulled to make changes happen.

Mr. Koizumi found the string in the postal saving system.

I shall continue deregulation in a more effective way.

Here is an example.

This is what I did five years ago when I was LDP Policy

Chief.

Back then, to do anything involving administrative procedures, you had to give the government, local or central, documents in paper form.

I counted the number.

It turned out, 52,100 kinds of actions needed paperwork to be sent, or to be handed to the government.

I changed all that, by introducing just a single bill, “Bill Number 151 in the year 2002”.

Now, you can do everything on-line. You don't have to show up at the local government office. You click on your computer, and you are all set.

That is what structural reforms are like. It is to reduce the cost of Japanese economy, enhancing your profitability, giving more to the shareholders, paying more to the employees.

And on the pension scheme, I will ensure that each and

every man and woman gets a notice from the government so that he, or she, can have a clear picture about what is going on in their pension.

That is to assure them, that they can have hope for the future.

Now, ladies and gentlemen,
I have never lost hope in what the Japanese can do.

On foreign policies, I will say a couple of things.

But I see absolutely no need to speak on Japan-US ties. The importance of which is self-evident, and will it remain so.

Furthermore, they have never been stronger than they are now.

If you are interested, you can see how I view the US in my own essay, entitled, ‘I and America’, in a book I published a couple of months ago.

On Asia, I shall waste no time, to deepen relations with Asian countries.

From Seoul to Beijing, to Singapore to Delhi, many opportunities await us.

I must also remind you, that I was the first Japanese Foreign Minister, who said openly, that I should welcome the rise of China.

Recently, they say in newspapers that Mr. Li Zhaoxing, former Chinese Foreign Minister, and I had a small talk in an unlikely place of a men's room and that paved the road for Japan and China to mend the fences.

I must admit that THAT was actually the case.

I have just revealed a state secret, but I feel very proud that Mr. Li and I got along very well indeed.

For Japan, few other countries are more important than the PRC. Good relationships are vital. I am glad to see that thanks to Prime Minister Abe, the ice between Japan

and China has melted away.

I must remind you also that I am very much bullish on the future of China.

Peace and happiness, ladies and gentlemen, always proceed in tandem with economic prosperity and democracy.

That is what is happening in this part of the world, from Indonesia to China.

I see that, actually happening almost everywhere, from Cambodia to Kazakhstan, from Georgia to Latvia.

Japan's presence, if it was in those places, could surely make a difference, for as I said here nearly two years ago, Japan is a "been there done that" nation, as she has had both good times and bad, successes and failures.

And it is from this belief, I worked with the people at the MOFA, to hammer out a new initiative to create an Arc of Freedom and Prosperity.

But please do not forget, you may say that that is my signature policy, the fact is, it is everyone's, because it is Japan's policy.

Last, without the hard work of the Japanese men and women in the SDF, without the dedication and discipline they showed on the soil of Iraq, and in the ocean off India, we could not have come this far.

The respect they have gathered from their colleagues in NATO and US forces has been for me a source of tremendous pride.

I shall not turn the clock backwards, on the foreign policy front, on the domestic front, and within my dearest party.

Thank you very much.

END

青年局主催・公開討論会

平成一九年九月二一日(金)午前一二時一〇分

自由民主党本部 九〇一号室

麻生太郎冒頭所見発表演説

衆議院議員 麻生太郎

麻生太郎です。自民党総裁選挙に際し、党青年局の皆様にはこういった機会を私に与えていただきましてありがとうございます。心から厚く御礼を申し上げます。

最初に、ここにご参加の方をはじめ、たぶん全員全員の気持ちだと存じますけれども、今、入院加療中の安倍総裁の一日も早いご回復と、一日も早い復帰を心から皆さんとともに祈りたいと存じます。(拍手)

●選挙は政治の「定期健診」

今、政治に多くの方が関心を持たれるようになりましたが、その中で、けっこう若い人も多くなってきたと思います。それはそ

れなりに良いことだと思いますが、政治に関心がなかった、また、わからなかったということ、私は決して悪いこととは思いません。政治に関心が無いというのは、それなりに政治がうまくいっている、うまく作用しているということですから。

青年局や学生部の皆さん、若いからあまり健康に興味がないかもしれません。健康な人は、健康に興味がない。関心が無い。あたりまえのことでしょう。それが「なんとなく今日はおちよつと胃の調子が……」とか、大体私たちがぐらいいになるとそうなります。

若い人は、二日も三日も続けてバンバン飲めるくらい健康なんだけど、そういう状態は注意しておかないと、なんとなく調子が悪くなって、ある日、医者に行ったら、医者が深刻な顔をして

「ご家族の方、呼んでください」と(笑)。大体終わつとる、そういうときは。だから、そのために健康診断というのが時々ある。

選挙も同じなんでしょう。これは四年にいつべんなり何年かにいつべんのいわゆる定期検診。民意、有権者による検診、それが選挙なんではないか。私はそう思います。

今まで長いこと日本の政治は、その基本的な方向は決まっていますから、そういった意味で、ほとんどの人が政治に関心がなく、政治が路傍の石のように忘れられていても、そこそこ世の中はうまく回っていた。だから、多くの人は政治が果たすべき役割に関心がなかったんだと思いますよ。

●「不安」はエネルギーにならない

ところが最近、若い人がえらく政治に関心を持つようになってきた。これはこれでいいことだと思いますが、同時にどうしてそんなに急に関心を持たれるようになったかを考えなければなりません。

それは私は将来に関して、皆さんが不安を覚え始めたんだと、そう理解しています。不安は不満と違ってエネルギーになりません。不満はエネルギーになるが、不安はエネルギーにならない。だから問題なんです。

そういった意味で、この不安の解消という政治的課題を解決するのは、すごく大きい政治家に与えられた使命です。

この九年間連続して、自殺者は三万人を超えている現状です。交通事故での死亡者は今は一万人を割りました。しかし自殺者は三万人を超えている状態がずっと続いているという我が国の現状を、異常だとは思いませんか？

もつとこの話は真剣に政治が取りあげ、そして討議されてしかるべきだと思う。高齢者、若い人、年齢は、関係ない。自分の命を自ら断つというのは、しかもその原因がいじめられてとか、事業に行き詰まって、とかいう話を聞くと、悲惨な気持ちになりませんか？

皆さんのように活力溢れている人もいるけれども、そうじゃない人も世の中にはいっぱいいます。そういう人達が抱く不安の解消を、政治家は当然考えなければなりません。基本的に今、政治に関心を持たれている多くの方々の、一番根底にあるのはそういうところじゃないかと、私はそう思っています。

さて、自民党青年局というと、やっぱり私が青年局長だったときに、すべての都道府県で青年局主催の街頭遊説をやったこと

を思い出します。

●青年局にしかできないこと

自分で企画立案したんですが、言った方がいいけど、やるのは大変でした。自民党の宣伝カー「あさかぜ号」が今みたいにくる人がある時代じゃありませんから、それをうまくこりレーして使っていくという企画から、その実施まで自民党本部の職員達と一緒につくっていきました。

街頭で政策を演説するだけでなく、全国の党員や有権者と語り合う機会もたくさんあったわけで、それが政策に反映される原点だとも感じていたわけです。

今、北朝鮮による拉致問題に関して青年局は、いろいろ企画されていると聞いていますが、いいことだと思います。青年局としてこういう問題に積極的に関わることにはやってしかるべき。

ただ全国一斉にやった場合は一過性で終わる可能性もある。問題の本性としてむしろ継続されるような形、たとえば、街頭演説をやるにおいても、いろんな地域において連続して行う、二つに分けて北と南でやっていくなり、いろんなやり方があると思うけど、こういうことこそ青年局で一番力を発揮できるところではないかと、私はそう思っています。

●「ハマコー」先生の街頭演説にたまげる

その全国遊説で、私は演説はすごく大事なものだということを勉強しました。

やつぱりすごいなあと思ったのは、自民党青年局長の経験者でもあるハマコーこと浜田幸一先生の演説。彼の演説が始まるとどんどん聴衆が増えてく。

それから、中山泰秀先生のお父さんですけども、中山正暉(まさあき)先生。この方とか、鯨岡兵輔先生の演説も、聴衆が増えていくんですよ。どんどん。だから、見てくれとか迫力だけじゃないよ(笑)。

しかし、シヤベリの仕方、これだけで人が増えると思ったら大きな間違い。そういうものではなくて、きちんとした説得力。

街頭演説は、交通信号が変わる三分しか止まっていけないという前提で話を切り換えていかなきゃいかんわけですが、あと一回信号待ってもいいなと思わせて六分聞かせる、そういった話というのを、青年局の人は勉強すべきですよ。特に都会、いわゆる大都市と言われる人口の多いところから選出されている議員は、この点に関しては絶対に訓練すべき、練習すべき。そのためには全国遊説なんていうのはいい機会ですよ。都会出身の人が過疎

地に行つて話をしてみたらわかるよ。全く受けないから(笑)。

なぜ私はこんなことを覚えたか。衆議院が中選挙区制のとき、私の選挙区は政令都市と、中山間農地と、いわゆる中核都市と種類の違う三つの形態からなっていました。三方所とも言うことを変えない限りは全然聞いてもくれないし、有権者も反応してくれない。片一方は過疎で困つて、片一方は過密で困つているところに、同じ話をしたつて、全然響かない。有権者の民意もくみとれないわけです。そういつたのは訓練と思つて、自分で勉強しなくちゃ。それが私は青年局にいる間に、絶対皆さんが習うべきことだと思つています。

●年金について知らせるハガキを出す

そこで幾つか、政策についてもお話させていただきます。私はやっぱり今、短期的な国民の最大の関心事は年金の問題だと思ひます。今年三五歳になった人、ここにいてと思うが、三五歳になった人は今、自分の年金の支給について心配してないでしょ？

なぜなら「あなたの年金はこうなります」というハガキを今年受け取ったはずだからです。だったら、それと同じように、年金について不安をもっている国民に、「ここは一回、経費がかかっても「あなたの年金はこうなっています」「あなたの年金はこの程度支給できます」というハガキを全員に出すべき。私は、必ずそれを

実行したいと思つています。

以前、やるべきだと言つたら、「できない」と言つたんです。役所のほうは。そんなことはない。必ず時間と手間ひまかけりやできるはずだ。それでもし自分の記録が合わない人がいれば、きちんとそれで照合できるんだから。

いいチャンスじゃないですか。とにかく、ハガキを一回、きちんと出す。ほとんどの人にとつて年金に関しては、自分が幾らもらえるか自分が損をしていないかが最大の関心なんだから、そういった意味ではそれによつて気持ちの不安、さっき言つた不安が解消されることになる。私はそういうもんだと思つているんです。

●北朝鮮とは「圧力」なくして「対話」なし

また、拉致問題に関しては、少なくとも国際社会において、明らかに「これはテロの一種だ」と認知されるようになった。日本は北朝鮮に対して「対話と圧力」の政策、これをずっと一貫してやってきましたけれども、あの国に対して圧力なくして対話が成り立つたことが一回でもありましたか？

私はそれが北朝鮮との交渉の歴史だと思う。外務大臣をしているときに、北朝鮮によるミサイル発射、核実験があった。日本はあの時、国連安全保障理事会の非常任理事国メンバーの一員と

して、国連の議論をリードし、間違いなく全会一致で、北朝鮮に対する非難決議を採択できた。

あの全会一致での決議を受けて、少なくとも北朝鮮は、六者協議という交渉に乗ってこざるを得ないことになった。あれが圧力でなくて何です？

あれこそが交渉の基本なんだと、私はそう思っています。ただただお米を何十万トンあげたら交渉に応じるというものではありません。もともと北朝鮮は「拉致問題は解決済み」と言っていたんですよ。それがあの決議を境に少なくとも交渉の場に出てくることになった。今回の六者協議における二回の日朝作業部会においても同様です。

私は拉致され北朝鮮にいる多くの日本人の方々が、みな「死んでいる」、「殺されている」という前提で交渉する気はありません。

●拉致被害者家族の方々に申し上げたこと

外務大臣になつてすぐの頃、拉致被害者家族の方がお見えになったとき、私は、「あなたたちは、すぐ何とかを止めろとか言うけど、それによつて今、拉致されている人がそれを理由に殺されたときは、誰が責任を取るんですか？」と。そういったことも考

えて、拉致被害者は生存しているという前提で、「われわれは丁寧な、丁寧な、ここまでずっと交渉してきたんです」ということを申し上げました。

今後とも私は、「対話と圧力」という拉致問題解決の基本方針を変えるつもりはありません。それが私の拉致問題に関する考え方です。

●「税源移譲」のもたらしたもの

そして、ここへは地方から来られた県議や市議、町議、村議の方、大勢お見えなんだと思いますが、やっぱりこの六年間の小泉改革に対しては、その陰の部分に地方の不満が大きい。そういった意味で、これをどうやっていくかということ、大事なところで。私が総務大臣のとき、国税三兆円分の財源を地方に移管しました。全省庁反対。賛成した省庁、ゼロ。それでも小泉純一郎総理大臣の決断で、三兆円分を委譲した。間違いなく、大幅に税源が地方に渡った。

しかし同時に交付税が減った。地方交付税。この地方交付税というのは、自分の市、自分の町、自分の県というものを経営していく上で、自治という観点から自由裁量、自由に使える部分が多い。だからこそ、このところをどういう具合にやるかということ、もう一回考えなければいかん時にきているんじゃないで

しょうか。

今はその算出基準の根幹が、人口割りですが、それだったら人口が減少するところはどんどん減る。しかしそういうところほど、この交付税に期待しているという現実をふまえ、対応していかなくてはいいけない。

●地方再興に不可欠の政治指導力

次に、地方のなかでも、中山間農地の話。例えば東京の人が飲んでいる水はどこから来ているのか。それは利根川だったり、多摩川からきています。その河川は誰が治水しているんです？

おおもとは中山間農地で米を作り、畑を耕している農家の人たちでしょう。中山間農地は、あれだけ治山治水に貢献しているんだから、それに対しては、農水省の施策だけでなく、もっとひろい視点から考えられてしかるべき。

農水省だけじゃなく、環境の観点でいけば環境省、森林でいけば林野庁、また従来の河川の問題でいけば、国土交通省の話になるかもしれない。そういった省庁を全部またがってやるには、それは間違いなく役所の縦割り行政ではできません。だからそれを主導する政治家の強いリーダーシップが要るんだと、私はそう強く思っております。

●新総裁の最大任務とは

最後になりましたけれども、次の自民党総裁になる人の一番考えねばいかんことは、次の衆議院の総選挙において党が勝利することです。これが総裁に与えられた最大の任務であり、責任だと思っております。

皆さん方のご理解をいただいて、候補者の選定には公募制度等いろいろなものをやらせていただきましたけれども、これをうまく活用して、各選挙区支部で勝てる候補者を選ぶ。そして勝てる候補者を自民党とその人の民意をくみとる努力を相乗させて、勝利する。当選させる。

そういった基本的な考え方というものを腹に収めた上で、来る総選挙の対策というものを考えていただき、この総裁選挙もそういう意味も重ね合わせて党員の、青年局の皆さんの意志を反映させていただければということを最後にお願い申し上げます。

そして皆さんが誇れる自民党、「おれは自民党员だ」と堂々と誇れるような政党にするべく、私は全力をあげたいと思います。ご清聴、ありがとうございます。(拍手)

(了)

日本記者クラブ主催・自民党総裁候補討論会

平成一九年九月二二日(金)午後一時—三時

日本記者クラブ(内幸町プレスセンタービル)

麻生太郎所見発表演説

衆議院議員 麻生太郎

麻生太郎です。

まさか同じお招きを、この短期間で二度も頂くとは、ちょっと想定外でした。

本日もどうぞ宜しくお願いします。

わたくしの所信を申し述べます。

私は、「小さくても温かい政府」、「小さくても強い政府」を作りたいと申し上げております。

「名目成長率にして、少なくとも二%以上」、フローの伸びを追求する、と申しております。

「活力ある高齢化社会」ということも、申しあげております。

また中国との付き合いを聞かれたときは、「日中共益」つまり、「中国とは共益だ」と申しております。

それと、「地方分権」、「地方に経営感覚を」ということもしきりに申し上げます。

●わたしの歴史観、信条を語ります

今日は、いま申しました公約について、全然、違った角度からご説明いたします。

まず、わたしが政治信条といたしますところは、つまるところ、「日本人への信頼」、であります。

有史始まってこの方、日本ぐらい、ではないでしょうか。

切れ目のない、伝統を保持しております。

一つの国家として、自主独立の道を営々と歩んできた国家だと存じます。

危機に臨んで、外国勢力に学ぶことはあっても、引き入れるということはしておりません。幕末の危機に際してさえ、そうでありました。

天皇家におかせられましては、その間、男系の皇統を、ずっと維持しておいでである。

我が国の歴史には、お蔭さまで、一本、太い大黒柱が通っているわけであります。

●保守すべきは保守、改革すべきは改革

これほどまでに、今様の言葉で言うところとサステイナビリティ、持続可能性というものを、体現して見せた国というものが、ほかにあるだろうか。

歴史を通じて、国柄というものを維持して参ったのが、わたしどもの国、日本であります。

人間、じーっと、同じひとつの姿勢で立つということとは、よほど鍛えた筋肉をもつ人でも、そうそうできません。

日本という国は、たとえば言えば二千年、それをやってきた

国である。

足腰が、よっぽど強い国である。

保守すべきは保守し、危機に臨んで改革すべきは改革してきた。

そのことに先人達は文字通り、命をかけてまいりました。わたしには、そう思えます。

●中国の台頭をなぜ大歓迎するか

よく「中国の台頭で、日本は負ける」といった類の論調が出て参ります。

わたくしは、この種の話があまり信用できません。

中国の台頭という現象を見まして、「大歓迎」と、本心で思いました。

なぜなら、日本という国は、強い相手が周りに現れますと、先方のいいところを吸収し、必ず自分の力で、脱皮をする国であります。

ですから、中国とは、「共生」というより「共益」、つまりお互い益するという関係にならねばならぬし、できると信じております。

なにせ、持続性においてすぐれた国でありますから、国家経営の模範というものも、ハツとするようなものが、実は過去の歴史

にもいざいます。

●江戸にあった「小さくても温かい」政府の模範

例えば江戸の街。人口百万の都市を統治する、今で言えば行政や司法の仕事をみな担当していたのが、大岡越前などでおなじみの江戸町奉行所であります。

その、奉行所で働いていたお役人は、何人くらいだったと思われるますか。

わずか「三百人弱」。百万都市に、三百人だったんですよ。

それでいて、幕末日本にきた外国人は、江戸の清潔ぶりとか、老いも若きもニコニコとして、機嫌よく暮らしていたところに、驚いておられます。

たった三百人という、まあ小さな政府としては、究極の小さな政府。

その小さな政府が、同時に、温かい政府でもあったのです。

それはほとんどの、今なら区役所がしているような仕事というのは、全部、民間人がやっていたからです。その多くは、ご隠居さんたちです。

江戸時代というのは、究極の、民間活力、ボランティア全盛期で

す。「活力ある高齢化社会」です。

このあいだ、総務省が出した資料では、六五歳以上の高齢者が、二七四四万人。

しかしそのうち「介護」か「支援」が必要な人口は、別の統計によれば一六・六%ですよ。大多数の高齢者は、元気なんです。

昨日、六七回目の誕生日を迎えたわたしにしてからが、一年に二回も、しんどい総裁選を戦えるわけです。

●「活力ある高齢化社会」には名目二%の成長が必要

この人たちを、「税金を使う人」でなく、「税金を払ってくれる人」にしたい。できるはずだ、というのが、私の言う「活力ある高齢化社会」であります。

そしてそのモデルというのは、わたしども一度、二百年以上にあたって、やったことがあった、ということでもあります。

今、高齢者の約六割が働く会社は、従業員数三〇人未満、いわゆる零細企業です。

したがって、わたしは名目成長率で見て、二%以上の成長が必要だ、と申している次第です。

高齢者を吸収してくれる零細企業に、しっかりしてもらわねばならぬ。その点だけとりましても、成長重視は大事だと、思っ

おります。

また、地方の会社に頑張ってもらわねばなりません。その環境づくりとか、方向づけとか、地方の首長さんにやつてもらわなければならないと存じます。

権限と、財政面での裏づけと、人材を工面してさしあげる必要が、あろうと存じます。

それによつて、地域を経営していただく。

●漫画のルーツは江戸の子ども文化

もう一度江戸の話です。

江戸の世というのは、子どもを遊ばせていた、子どもを「子ども扱い」しておりました。

何を当たり前な、とおっしゃるでしょうが、同時代の世界に、そんな国は二つとありません。

桃太郎、一寸法師、浦島太郎。子ども向けの物語が、あんなに早くからあった国というのは、ほかにあるんでしょうか。

ちなみに、大人向けではありませんが、あの「グリム童話」は、(発表が)一八二二年であります。

私はこれが、文化の土台としてあったから、昭和に入つて大恐慌になった時、ある偉大な失業対策事業が、全国に広まったんだと存じます。

それは何かといえば、「紙芝居」です。失業者が、手軽にできる仕事でした。

紙芝居は、シネマの技法ですよ、あれは。

映画のやり方を、取り入れている。そうして全体が、ストーリー。物語になっている。

これを、わくわくして見た世代が、どういう世代か。

戦後漫画のバイオニアになった、偉大な作家たちの世代です。だから、ストーリー漫画という、それまで世界のどこにもなかった独特のジャンルが生まれました。

映画の技法を駆使した、文法が生まれました。

それがいま、ドラゴンボール、キャプテン翼、等々になって、世界中の青少年を、熱狂させております。

どうでしょう。日本にある物は、長い長い、歴史の熟成を経ております。

もういい加減、日本人の持つ、日本文化の持つ、この種自発的な創造力、新しいものを作る力というものに、信頼を置いていい時代だと、わたしは思います。

改めて述べます。我が国は脈々と引き継ぐ伝統に誇りを持ち、
変えるべきは、勇気をもつて改革、新しきを創造していくことが
出来る国家なのだ。

幕末の志士たちのごとく、私も、お国のため、国家のため、文字
通り命を賭けて参る所存です。
有難うございました。

(了)

(参考文献)

徳川恒孝『江戸の遺伝子・いまこそ見直されるべき日本人の知恵』(二〇
〇七年、PHP研究所)

竹内 一郎『手塚治虫IIストーリーマンガの起源』(二〇〇六年、講談社)

平成 19 年 9 月・自由民主党総裁選挙における
麻生太郎全演説
平成 19 年 10 月麻生太郎事務所発行

【議員会館】

〒100-8981
東京都千代田区永田町 2-2-1
衆議院第一議員会館 210 号室
電話：03-3581-5111（代表）

【筑豊事務所】

〒820-0040
福岡県飯塚市吉原町 10-7
電話：0948-25-1121